

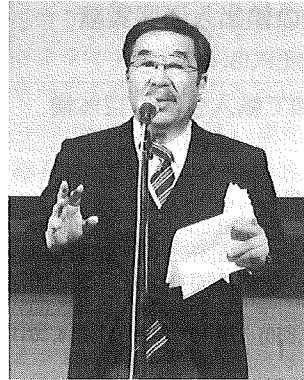
AMJ 来賓130名集め10周年謝恩パーティーを開催

日本の“Mr.レアメタル”が次の資源制約に備える

レアメタル専門商社のアドバンストマテリアルジャパン (AMJ, 中村繁夫社長) は、2月26日に東京・永田町の「ザ・キャピトルホテル東急」で130名を超える来賓を集め、設立10周年の謝恩パーティーを開催した。同社は、蝶理のレアメタル部門を率いていた中村氏がアルコニックスの出資を受けMBO(経営陣による買収)により独立し、各種のレアメタル市場で一大勢力を築いてきた。関連企業や政官学の多数の関係者がお祝いに駆けつけ、資源エネルギー庁の鉱物資源課長時代にレアメタル政策で司令塔の役割を果たした安永裕幸氏(経済産業省産業技術環境局 審議官)は「潤沢な予算で資源開発を支援できる体制を整えたが、ぜひレアメタルの大型鉱山を開発して欲しい」とエールを送った。JX 日鉱日石金属の岡田昌徳会長は「銅の相場は乱高下しいわば魔物を相手にするが、AMJはレアメタルという魔物中の魔物を相手にし、日本のハイテク基盤産業を支えてきた」と祝辞を述べると、レアメタルの製錬・リサイクル研究で第一人者の岡部徹氏(東京大学生産技術研究所 教授)は「一般に広く啓蒙したことは誇るべき業績。今後も供給のボトルネックを示し、産業育成や人材育成にぜひ貢献してほしい」と期待感を述べた(岡部氏のレアメタル研究会の詳細はP.3)。

財務体質と管理体制を強化し機器の輸出入部門を新設

中村氏は「AMJはレアメタルの海賊船と呼ばれてきたが、創業からの過去10年は激動期だった」と振り返る。設立時はレアメタルの認知度が非常に低かったものの、ハイブリッド車や携帯電話などに大量に使われると、一般的な言



10周年謝恩パーティーで挨拶する中村繁夫社長

葉になった。一方で、途上国では資源ナショナリズムが高まり、資源の囲い込みが始まった。ここ10年を3つの時期に分けると、04~07年頃は資源制約が顕在化し、市況は多くの鉱種で非常に値上りしたが、08年秋以降はリーマンショックのあおりで暴落。10年9月には尖閣諸島問題が起き、中国が輸出禁止に行うなどでレアアースの市況が暴騰した。同社は長らく資源制約に懸念

をもち、中国の合弁会社などで最低限の原料調達を行える体制を整えてきた。当初の連絡事務所は北京、上海、モスクワ、ウラジオストック、アルマトイ、トロントの6ヵ所だったが、12年から北京とシンガポールに現地法人を相次いで立ち上げた。シンガポールは調達機能の一部を移し、東南アジア市場の開拓を目指している。

同社は今後の10年間を見据え、3点に注力する。第1に財務体質の強化。足元の市況は低迷しているものの、18年前後に資源制約の問題が再度起きるとみて、資源投資を行うために企業体質を改善する。第2に、関連機器・プラントの輸出入、技術輸出に対応する新規部門を創設。同社はチタンのEB(電子ビーム)溶解炉やレアアース関連機器を取扱ってきたが、今後は新部門がR&Bを注力し、日中間の素材分野の技術交流などを目指す。第3に、マネジメント体制の強化。コンフリクトフリーやコンプライアンスの遵守、環境負荷の軽減に対応できる組織運営を目指す。